

# 熏風

教育委員会だより

第零号

平成二十九年十月一日(日)

河内長野市教育委員会

## “和敬清寂”の心

“夢だより”に変わる新たなタイトルを“熏風”と名付け、今号から、私のメッセージから「教育委員会だより」にバージョンアップしました。

これまで、“夢だより”の中では幾度となく「熏習（クンジュウ）」という仏の教えに通じる指導法を紹介してきました。あらためて整理すると、桜のチップを用いて肉等を薫製にする料理法があるが、人に対して使う言葉であるために「薫」の“クサカンムリ”を外して「熏」という文字を使うらしい。

つまり、「熏習」とは、霧の林中を歩いていると衣がいつの間にか湿気を帯びるように、指導者の匂いが子どもたちに自然と浸み込んでいくということです。“指導”というよりも“学び”といった方が適切でしょう。

学校や地域における日常の生活においても、私たちが気付かない間に自然な形で子どもたちの感性に沁み込んでいるものがあります。例えば、学校に登校して目にする下足室の様子。乱れもなく整然と並んでいる光景を目にした子どもたちの心には、人の端正さの大切さが焼き付き、儀容をつくろうことが“熏習”されたのです。子どもたちを取り巻く人的、物的な環境は、ほとんどすべてが“熏習”として機能しているのでしょう。

つまり、人と人との出会いや集団を通した営みの中で、子どもたちは意識せずして“良き人”として磨かれているのです。生き方のモデルを失いつつある現在において、極めて重要な指導法と言えます。

新たなタイトルに使った“熏風”は、全唐詩「夏日聯句」の「人皆苦炎熱 我愛夏日長 薰風自南來 殿閣生微涼」という五言絶句から拝借したものです。禅語によく使われる“薰風南より來たる”とは、炎熱を“薰風”と感じ取る心を顕したものとと言えます。つまり、善悪や上手下手、生死等々、世の中に多くある対立する観念に何らこだわりもなく偏りもなく、“薰風”の如く無心の境地で捉えて、生きていくことが出来れば・・・と言った意味でしょうか！

価値観が多様化する中で、最前線に立って子どもたちの育ちに対峙している先生方であるだけに、その心に吹き込む八風には“熏風”が最もふさわしく、「薫」でなく敢えて「熏」の文字を使った思いを感じ取っ

てほしいと思う。

さて、これまで先人が護り継いできた国民的な感性の基盤となる“不易な精神”は、日常生活の様々な判断の基準として機能してきました。そして、それらは、“生きる意欲”の源泉として“和敬清寂”の心に象徴されると言えます。

内実の清らかさによって、心静かに日々の生活に向き合うことが出来れば、どれほど生活が豊かなものになるか、ストレス社会と呼ばれる人間関係のすきんだ現代社会においてはなおさらのことです。誰しものが、心身ともに清廉な清らかさ、つまり“清寂”の心境で日々の生活を送りたいと願っているはずで。“和敬清寂”の心は、与えられた生命を大切にしながら一生涯の人生を送る上での生きる基盤になるものと言えます。

この精神を守り育てるために、“美しき日本の心”と出会う機会と場を教育活動全体に組み込むために設定された『古典の日に関する法律』の意義は実に大きいと思う。多くの先人達が守ろうとしてきた心と同じ潮流に従ったものです。

「古典」とは、文学や美術、音楽はもとより、伝統芸能、華道や茶道、書道といった生活文化、武道等の身体文化を含む広義なものを総称したもので、謂わば、我が国の文化、伝統のすべてを含んだものと言えます。戦後の歩みの中で、人の心を感化する情緒豊かな表現が苦手になっている現代の日本において、“美しき日本の心”を再認識させる手立てを講じる必要性を法制化した意義は極めて大きいのです。

今、多文化が共生する社会に向かって時代が大きく進展している中で、我が国特有の立場を諸外国が理解する上で重要となるものが、我が国の文化、そこに根付くアイデンティティ、感性です。それは視点を変えれば、国際社会において我が国の方向性を決定する時の基準なのです。つまり、世界の壁がますます薄くなっていく未来の社会において、これまで以上に不可欠のものが、“和敬清寂”の精神と言えます。

この不易な精神的伝統を享受し、次代に受け継ぐことは、私たち教育関係者の重要な役割です。特に、社会、経済のあらゆる分野において、“美しき日本の心”が重要であると言いながらも、これまで引き継がれてきたわが国固有の文化、慣習等が姿を消し始めている昨今において、その意義は極めて大きいと言えます。

「和敬清寂」の精神、感性の内実に直接触れる「熏習」という指導法、指導と呼ぶよりは“歩み”によって、子どもたちが我が国の文化を呼吸する機会を設け、国際人として必要な不易な精神、感性を育てていきたいものです。

(文責：和田栄)